

## 2) 琵琶湖におけるイケチョウガイの生息状況

西森克浩・上野世司・藤岡康弘

【目的】現在イケチョウガイは琵琶湖南湖の草津川以南(主にN135° 53' 05.4"・E35° 01' 04.8"、N135° 54' 05.4"・E35° 01' 04.8"、N135° 54' 05.4"・E35° 02' 09.6"、N135° 53' 05.4"・E35° 02' 09.6"の4点で囲まれる水域、約6.6km<sup>2</sup>)で主に冬期に行われているドブガイを対象とした手繰第3種漁業(貝びき網漁業)で少量混獲されている。また、琵琶湖全域で行われているセタシジミを対象とした手繰第3種漁業で極少量混獲されている。しかし、イケチョウガイの採捕量が非常に少ないことから琵琶湖のイケチョウガイは絶滅の危機に瀕していることが懸念される。今回は草津川以南に生息するイケチョウガイの成長を調べるとともに生息量を推定した。

【方法】草津川以南で手繰第3種漁業で漁獲されたイケチョウガイ200個体(平均殻長143mm、最小116mm、最大183mm)に標識をつけて7月8日に同水域に放流した。ドブガイ漁はイケチョウガイの成長が止まると考えられる11月から開始された。漁獲されたイケチョウガイは標識の有無を確認するとともに体型を測定した。また、これとは別に漁期開始前に手繰第3種漁業を行い漁獲物組成を調べた。

【結果】漁期開始前に行った手繰第3種漁業での漁獲物組成はドブガイ56.9%、メンカラスガイ 42.7%、イケチョウガイ0.4%であった。操業開始後に漁獲されたイケチョウガイは795個体であり、そのうち31個体が標識貝であった。標識貝の殻長の成長は0mm~3mmで、平均成長量は0.8mmとわずかであった。1mm以上成長した個体は12個体であった。また、当該水域でのイケチョウガイの生息量は5,129個体(個体数=795×200÷31)と推定された。今回の結果からイケチョウガイの生息量は非常に少なく、かつ成長も悪いことが示唆された。また、当該水域での生息密度は、1,287m<sup>2</sup>(約36m×36m)当たり1個体(6.6km<sup>2</sup>÷5,129個体)であった。イケチョウガイはかなり疎に分布しているため、受精確率が低くなっていることが推測されることから、産卵期前に採集して人工的に受精させる必要があると思われる。固有種であり、また、真珠母貝としての有用な遺伝子資源であるイケチョウガイを絶滅から救うための施策を講じなければならない。

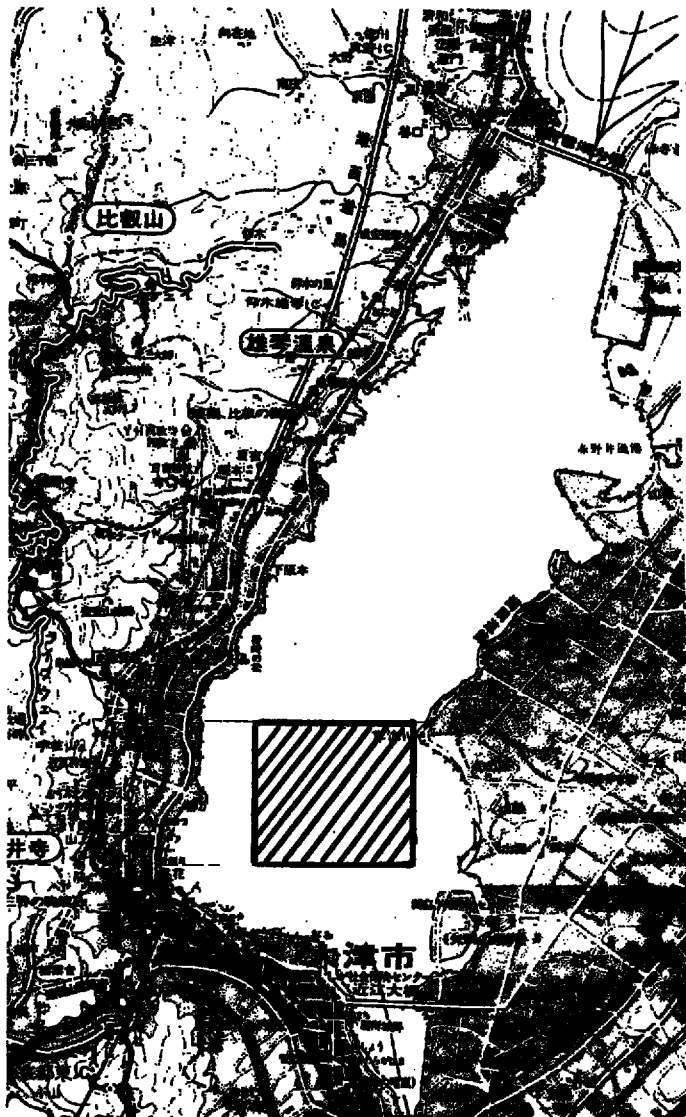


図1 琵琶湖南湖でのイケチョウガイ生息状況調査水域

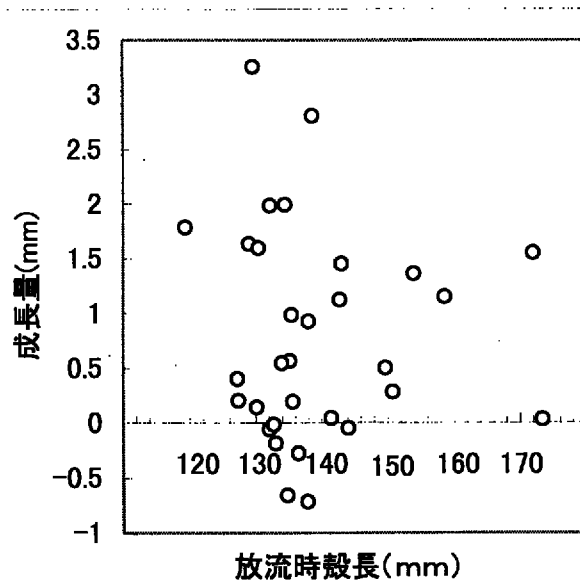
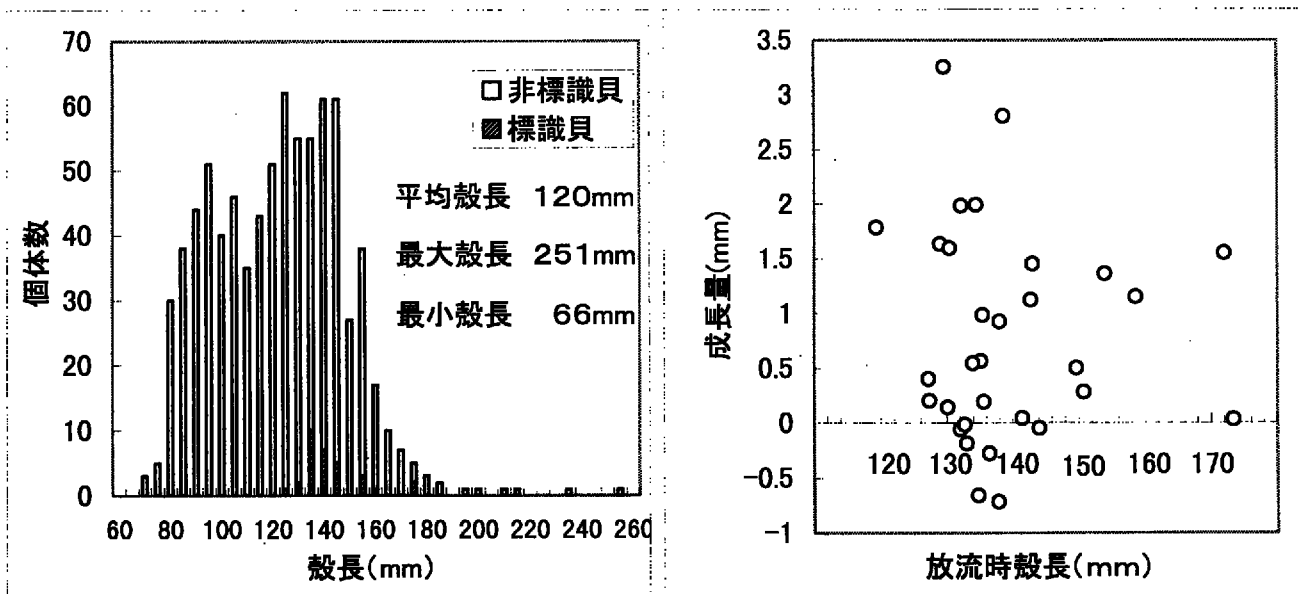


図2 琵琶湖南湖で採捕されたイケチョウガイの殻長組成 図3 標識貝の成長(7月放流、11月～翌4月に再捕)